



神戸女学院大学



東京音楽大学



Shōwa  
UNIVERSITY  
昭和数据音楽大学

音楽系3大学による共同プロジェクト

# 音大連携による教育イノベーション

音楽コミュニケーション・リーダー養成に向けて

**平成 26 年度 活動報告書**

このプロジェクトは文部科学省 平成 21 年度「大学教育充実のための戦略的大学連携支援プログラム」に選定されました。

音楽系3大学による共同プロジェクト  
音大連携による教育イノベーション ～音楽コミュニケーション・リーダー養成に向けて

## 平成 26 年度 活動報告書

### 目 次

---

はじめに .....	2
教員・スタッフ紹介・平成 26 年度活動概要 .....	3
<b>平成 26 年度「ミュージック・コミュニケーション講座」</b>	
1. 第 1 回 ピアニストが繋ぐ音楽と社会 .....	4
2. 第 2 回 ワークショップと学び .....	6
3. 第 3 回 子どもの居る場にアーティストが行く意味 ～小学校や児童養護施設などでのワークショップの実践～ .....	8
4. 第 4 回 音楽は心で聴けば解るモノ? .....	10
5. 第 5 回 Playful Learning ～ミュージック・ビデオをつくろう～ .....	12
6. 第 6 回 即興・遊び・作曲 ～音楽とコミュニケーション～ .....	14
7. 第 7 回 神戸女学院大学 実習報告会 .....	16
8. 第 8 回 東京音楽大学 実習報告会 .....	17
9. 第 9 回 昭和音楽大学 実習報告会 .....	18
10. 第 10 回 総括 .....	19
<b>3 大学実習報告</b>	
1. 音楽ワークショップ「みないけ キッズアーティスト『リズム・リズム・リズム』」 .....	20
2. 東京音楽大学 MC 講座特別セミナー及び音楽ワークショップ .....	22
3. ワークショップ作りに挑戦! .....	24
4. 『音楽作りワークショップ特別研修』ならびに 第 5 回『音で遊ぼう! 子どものための音楽作りワークショップ』 .....	27
おわりに .....	31

## はじめに

東京音楽大学・神戸女学院大学音楽学部・昭和音楽大学の3つの大学による「音大連携による教育イノベーション～音楽コミュニケーション・リーダー養成に向けて」は、「大学教育充実のための戦略的大学連携支援プログラム」採択による文部科学省の支援(平成21～23年度)が終了した後も、関係者の協力のもと継続・発展が図られ、6年目を迎えました。3つの音楽系大学がそれぞれの特性を生かし、学生や教職員の交流・関連団体の協働を通じた新しい教育活動のもと、専門力・社会性・コミュニケーション能力を備えた人材を育成し、地域社会に貢献し様々な場で活躍できる「音楽コミュニケーション・リーダー」を養成することを目指しています。

3大学を「インターネット・ビデオ会議システム」で繋いで実施する「ミュージック・コミュニケーション講座」では、今年もヴァリエティに富んだ講師の方々から、興味深いお話や活動をご紹介いただきました。また、各大学の学生達による実践活動の報告では、活発な意見交換や質疑応答が行われました。

また、秋には、英国ロンドン市ギルドホール音楽演劇学校のリーダーシップ修士課程修了者2名を日本に迎え、東京と神戸で音楽ワークショップ研修を実施することができました。

本報告書は、このような1年間の取り組みと学生達の学びの軌跡を記録としてまとめたものです。

我々の活動にご理解、ご協力いただいた皆様に御礼申し上げますとともに、関係の皆様にご高覧いただければ幸いです。

2015(平成27)年3月

音楽系3大学連携事業 取組担当者  
武濤京子(昭和音楽大学 教授)

---

※開講科目名

ミュージック・コミュニケーション講座Ⅰ・Ⅱ(東京音楽大学)

音楽コミュニケーション①・②(昭和音楽大学)

ミュージック・コミュニケーション講座(神戸女学院大学)

### 3 大学連携事業

#### 教員・スタッフ（平成 27 年 3 月現在）

東京音楽大学	武石 みどり	東京音楽大学音楽学部	教授
	上條 浩史		連携センタースタッフ
	高橋 英美		連携センタースタッフ
神戸女学院大学	津上 智実	神戸女学院大学音楽学部	教授
	永吉 りう子		連携ルームスタッフ
	増田 明日香		連携ルームスタッフ
昭和音楽大学	武濤 京子	昭和音楽大学音楽学部	教授
	赤木 舞		非常勤講師
	佐藤 良子		助教

### 平成 26 年度の活動

#### ●ミュージック・コミュニケーション講座の実施

いずれもインターネット・ビデオ会議システムにより、3 大学間を結んで実施。

オリエンテーション：平成 26 年 4 月 16 日（水）	発信校：東京音楽大学
第 1 回：平成 26 年 5 月 7 日（水）	発信校：神戸女学院大学
第 2 回：平成 26 年 5 月 28 日（水）	発信校：東京音楽大学
第 3 回：平成 26 年 6 月 18 日（水）	発信校：昭和音楽大学
第 4 回：平成 26 年 7 月 9 日（水）	発信校：昭和音楽大学
第 5 回：平成 26 年 10 月 8 日（水）	発信校：神戸女学院大学
第 6 回：平成 26 年 10 月 29 日（水）	発信校：東京音楽大学
第 7 回：平成 26 年 11 月 12 日（水）	発信校：神戸女学院大学
第 8 回：平成 26 年 12 月 3 日（水）	発信校：東京音楽大学
第 9 回：平成 26 年 12 月 10 日（水）	発信校：昭和音楽大学
第 10 回：平成 27 年 1 月 14 日（水）	発信校：東京音楽大学

#### ●その他の活動

平成 26 年 7 月 22 日（火）、7 月 23 日（水） 於：区民ひろば南池袋  
音楽ワークショップ『みないけ キッズアーティスト リズム・リズム・リズム』

平成 26 年 9 月 23 日（火・祝） 於：東京音楽大学  
特別セミナーならびに音楽ワークショップ『みないけ キッズアーティスト リズム×うた×リズム』

平成 26 年 9 月 17 日（水）、9 月 24 日（水） 於：昭和音楽大学  
『ワークショップ作りに挑戦！』

平成 26 年 9 月 24 日（水）～27 日（土） 於：神戸女学院大学  
『音楽作りワークショップ特別研修』ならびに第 5 回『音で遊ぼう！子どものための音楽作りワークショップ』



## 平成 26 年度 第 1 回「ミュージック・コミュニケーション講座」

講座の名称	第 1 回ミュージック・コミュニケーション講座 「ピアニストが繋ぐ音楽と社会」
講 師	仲道郁代（ピアニスト）
実施日時	2014 年 5 月 7 日（水）18:30 ～ 20:00
実施場所	神戸女学院大学音楽学部 合奏室
講座の概要	<p>第 1 回講座はピアニストの仲道郁代氏を講師に迎え、音楽家が社会と繋がるためにはどうしたらよいかというテーマで講義が進められた。</p> <p>仲道氏の活動は、「鑑賞」「他ジャンルとのコラボレーション」「ワークショップ」と大きく 3 つに分類される。これらは「音楽のすばらしさをもっと多くの人に伝えたい。音楽に対するマイナスイメージを振り払いたい」という思いで行なわれている。こうした活動を行う際、「誰のために」「何を」「なぜ」と自ら問うことで、改めて演奏を考える機会となって自分自身に還元され、得られるものがあったという。</p> <p>音楽を聴いたり演奏したりすることは、受け手によって全く異なる性質を持つ。そのため成果が測りにくく、効果を伝えることもむずかしい。だが講師は「大切なものだからこそ説明がしにくかったり目に見えにくかったり、表現がむずかしいのではないか」とプラスに捉え、「音楽は人に化学作用を起こすことができるもの。だから表面的なものではないにしろ、必ず変化が起き、それは参加者に効果をもたらしていると言えるのではないかな。なおさら音楽家は、何か効果を見つけてもらえることをめざして、さらに新しいことを考えていくべきだ」と述べた。</p> <p>講師が普段プログラム中で行っているアクティビティを学生が実際に体験する機会も設けられた。モナリザの絵を見て、モナリザがどのように感じているのかを想像したり、講師がピアノで演奏した曲が 3 つの絵のどれに合っているかを考えたり、なぜそう思ったのかを学生がそれぞれ発表したりした。感じ方は人さまざま、多様な意見が交わされた。</p> <p>最後に、このような活動は「コンサートホールで演奏するスキルがないから行うような活動ではない。音楽家自らが活動の意義を 1 ランク落とすようなことをしてはいけない」と留意点を述べた。「むしろ演奏するスキルに加え、様々なスキルを要求される活動である。だからこそ音楽大学に来ている今、これらの必要となるスキルを学ぶべきである。それを学んでこそ活動ができる」と学生が今何を考えるべきかを提示した上で、「何のために、何を自分はしているのかを問い続けることで自ずと答えが見つかり、壁にぶつかった時にも乗り越えられる。自分の社会的意義を見つけてほしい」と学生へ期待の言葉を投げかけて締め括った。</p>

### 〈学生のことは〉

- ・ 音楽そのものは何か、何のためにやっているのか、根本的な所から見つめなおすことができました。根本的といえども、普段深く考えてはいない部分が多く、逆にむずかしかったです。いろんな視点で見ることができました。

（神戸／ピアノ／2 年）

- ・ 久しぶりに、音楽をやっているということの意義、音楽をこの先どうやって生かしていくか、音楽ってどういうものか、そもそも何のためにやっているのか ...? 人生って ...? という深いところまで考えるよい機会になり、お話を聞けてよかったと思います。学年が上がるにつれてずっと逃げていた疑問と向き合うことができました。もちろんすぐ

に答えが見つかりはしないのですが、考えることは大切だと思いました。

(神戸／フルート／4年)

- ・初めて授業を受けてみて、改めてよかったと思いました。今回の講座を受けて自分の世界が広がったように感じます。仲道先生が仰っていたことで、人に伝えようと努力したことは必ず自らの糧になるという言葉が印象的でしたし、活動の実例を見ているときはワクワクしました。音楽の持っている力、奥深さも常に探求されていると感じて、自分の学ぶ意欲も強くなりました。今回の講座を受講できてよかったです。

(神戸／ピアノ／2年)

- ・「音楽の本質はクエスチョン」というキーワードが特に印象に残りました。今、大学でレッスンを受けて何とか答えを探そうとしていますが、答えが決して一つではないと気づかされました。クラシックを学ぶ演奏家はコンサートホールの舞台が活動の場だと思っていましたが、ワークショップをやったり、美術などとコラボしたり、いろんな活動の仕方があると学びました。

(昭和／クラリネット／1年)

- ・音楽を学んで、社会に出て「何を」するのか。芸術の本質はクエスチョン。まだまだ音楽にはポテンシャルが秘められている。それを生かし切れていないのかも知れないと思った。

(昭和／アートマネジメント／4年)

- ・人生において正解も不正解もない。芸術も同じである。「正解はない。だから自分の意見も相手の

意見も尊重される」という言葉を身に染みて感じることができました。(昭和／音楽療法／1年)

- ・仲道さんは「自分」や「音楽」を強く持っていると思いました。私たちはただ漠然と音楽の能力を伸ばし、いろいろな事柄に触れて、音楽を通して成長するために音楽大学に通っているのだと思います。でも実際に私たちは音楽で何ができるかを考え、言葉で感じたことを表わし、「音楽」とは何かを追及したりをするべきで、私は何一つ真剣に向き合っていなかったと気づかされました。

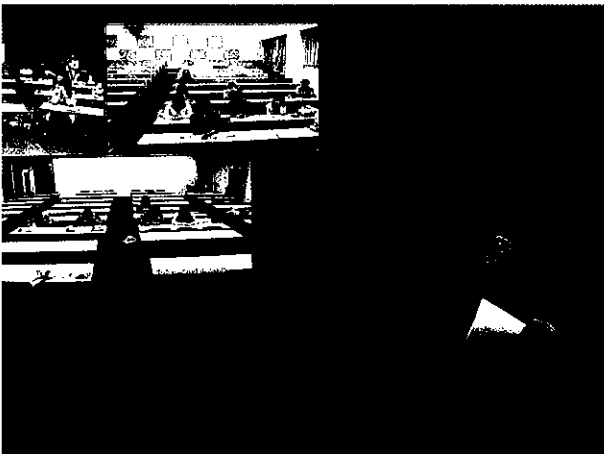
(東京／ピアノ／1年)

- ・ワークショップのよさって言葉で説明できるものではないのではないか、そんな簡単なものではないし、と思ったまま、私自身、自分から逃げたことと反省しました。もちろんすぐに説明できる自信はありませんが、言葉なしに何が伝えられるか？というお話に納得しました。自分がいいと思っていること、それを誰かに伝えられてこそ、自分も気がつけることが多いと思いました。

(東京／ピアノ／4年)

- ・音楽は素晴らしい、しかしそれをどうやって伝えるのか、なぜ伝えるのか、という部分から迫りていき、クラシックがあまり日本人にはなじまない事実を含めて、絵から音楽をどう解釈し受け止めるのかを体感し、答えを探し求めることが音楽の在り方なのだと理解しました。ワーク型、鑑賞型について事例を写真で見てお話を聞き、音楽の本質とは何かを深く考えさせられました！

(東京／作曲／1年)



※写真は神戸女学院大学での様子です。

# 平成 26 年度 第 2 回「ミュージック・コミュニケーション講座」

講座の名称	第 2 回ミュージック・コミュニケーション講座 「ワークショップと学び」
講 師	荻宿俊文（青山学院大学教授）
実施日時	2014 年 5 月 28 日（水）18:30-20:00
実施場所	東京音楽大学 A 館地下 100 教室
講座の概要	<p>「ミュージック・コミュニケーション講座」第 2 回は、昨年に引き続き青山学院大学教授の荻宿俊文氏を講師として、東京音楽大学にて実施・発信した。</p> <p>今回の講義は「ワークショップと学び」と題し、ミュージック・コミュニケーション講座で積極的・実践的に取り組んできた音楽ワークショップについて、教育学の視点から論じるものであった。社会と教育の変化の中での「ワークショップの必要性」、学びとしての「ワークショップの定義」の説明に加えて、ワークショップの中でアーティストが発する「ほんものの性」authenticity や「代替不可能性」（その人にしかできない）、「非言語性」が有効に機能することが強調された。</p> <p>ワークショップが「分かち合う」学びであり、正解を得るのではなく納得解を得るという経験の質に意義があること、多元的な価値を認め合い、硬直した思考をほぐし、無意識にもっていた感覚を打ち破って自己表現や自発性を導き出すものであることは、昨年までの荻宿氏の講義でも説明されたことであるが、初めて講義を聴く学生にとってはもちろんのこと、二度目、三度目に講義を聴く学生にも、それぞれ新しい気づきと理解の深まりがあったようだ。また、社会的自立と経済的自立についても言及され、これからの人口減少社会においては「やりがいのある持続的な仕事」を持つことが重要であり、ワークショップを単にボランティアとしてではなく持続的な仕事として位置づけ、社会の多様なシーンにおいてその場を自らクリエイティブしていくという方向性が示された。</p> <p>最後は、学生からの質疑応答で締めくくられた。</p>

## 〈学生のこぼれ〉

- ・素晴らしい講義でした。私は自信がなくて、ソルフェージュもできないし、歌も下手だと思って、学校内では縮こまって過ごしているのですが、3 年になってから人前で歌わなければいけない授業が増えて、最近ひどいストレスがあります。でも、「演奏とは代替不可能な感覚を信じてやる活動だ！」と聞いて、少し元気が出た…ような気がしました。ワークショップの根本的な定義からその背景まで、とてもわかりやすかったです。

（東京／声楽／3 年）

- ・「正しさを求めない」ということは分かっていたけれども本当に心から共感して考えていかなければ

ばならない…。音楽という学問をもっと知りたい。その与える影響を知識として獲得して、もっと参加型のワークショップを営むにあたって必要なことを知りたい。もっと音楽を知りたいです。知らない人にどうやってわかりやすく、そして何年も人の心に残るような活動をすればよいか。音楽、ART は教育学、宗教学、すべての学問に共通しているのだなと思いました。だからこそ音楽だけでなくたくさんの勉強をしなければならないと思いました。

（東京／ピアノ／1 年）

- ・ワークショップに必要なこと、これからの日本、どう考えながらこれから行動するかわかりました。代替不可能性…何か見つけたい！！それを伝

えるのはとても大切だと私も改めて思いました。  
自分にしかできないことを考えたい。

(東京／ピアノ／1年)

- ・人間はいろいろな感情を持ち、負の感情の中にはあるけれど、根源には協働性があると聞き、これをいかにして引き出せるかが性格の形成につながるのではないかと感じました。

(昭和／ピアノ／1年)

- ・「ワークショップ」という単語は知っていましたが、詳しい意味は知らなかったので、学べて良かった。

(昭和／声楽／1年)

- ・ワークショップについてのお話は2度目だったのですが、「音楽」ということに重点を置いた講義で参考になりました。アーティストの価値は代替不可能性にあるという話、興味深かったです。

(昭和／アートマネジメント／4年)

- ・まだ1回生ですが、将来のことを不安に思っています。今日この講義を聞いて、まだ遠い話と思っていたけれど、ちゃんと考えないといけないなというのを感じました。ちゃんと話の内容を飲み込めていない部分はありますが、1回生でこの講

座をとって少しでも他の人より多く考えるきっかけになればと思います。(神戸／ピアノ／1年)

- ・今、WSが社会に求められているということからお話して頂きましたが、その理由として社会が変わってきているということに納得しました。人、一人一人の価値観が違う中で私たちは生活していかなければいけないですが、そのひとつひとつを認め、自分も相手に認めてもらう、WSを行う中で心地よさを感じてもらえるようにできたら、すごく良いなと思いました。(神戸／ピアノ／2年)

- ・これからの日本で生きていく上で、現状を知ることがいかに重要か分かりました。多元的な社会の中で人とうまく接するために、正解ではなく納得解を求め、コミュニケーションを図っていきたいです。

(神戸／声楽／2年)

- ・ワークショップをする上で欠かせないものについて詳しく知ることができて、とても勉強になりました。相手の意見を尊重することや、協調性を持ち音楽でコミュニケーションをとることなど、教育的価値があり、教育実習に行ったときにこの心掛けを大切にしようと思いました。

(神戸／ピアノ／4年)



※写真は東京音楽大学での様子です。



# 平成 26 年度 第 3 回「ミュージック・コミュニケーション講座」

講座の名称	第 3 回ミュージック・コミュニケーション講座 「子どもの居る場にアーティストが行く意味 ～小学校や児童養護施設などでのワークショップの実践～」
講 師	堤 康彦（NPO 法人芸術家と子どもたち 代表）
実施日時	2014 年 6 月 18 日（水）18:30 ～ 20:00
実施場所	昭和音楽大学 南校舎 C511 階段教室
講座の概要	<p>第 3 回目の講座は、学校や地域においてアートと子どもの「出会いの場」を提供している NPO 法人 芸術家と子どもたち代表の堤康彦氏を講師として、昭和音楽大学からの発信により実施した。</p> <p>講師の略歴、この活動をスタートしたきっかけなどについて紹介がなされた後、「芸術家と子どもたち」の活動の柱のひとつである「エイジス・プロジェクト」について、その枠組み、対象、ワークショップ実施までの流れが説明された。「エイジス」は、アーティストが学校や保育園に出かけていって、先生と協力しながらワークショップ型の授業を実施する活動である。2000 年に活動がスタートし、これまでに 625 か所、約 3 万人の子ども達が体験している。子ども達はワークショップを通じて、創造する力、コミュニケーション能力、チャレンジする力や変化に対応する力などを身につけ、アーティスト自身も大きな刺激を受けていることが、実際のワークショップのビデオ上映とともに紹介された。授業実施にあたっては、「コーディネーター」が各学校の状況把握、教員へのヒアリング等を通じてアーティストと教員の橋渡しを行い、授業当日もサポートや記録を行い、振り返りから次回の計画立案に至るまで、「日常生活の中で自然な形でアーティストに出会わせる」ための大切な役割を担っている。</p> <p>次に、音楽分野（音楽家による）ワークショップの例、特徴、強みについて整理したスライドが示された。さらに近年では「社会的に弱い立場にある子ども達を対象とするエイジス・ワークショップ」のニーズが高まっていること、その現状と影響について説明があった。また、エイジスの活動の財政基盤は、活動開始時は民間の支援が主であったが、現在では国や地方自治体との協働や支援の割合が拡大していることが示され、質疑応答を経て講義を終了した。</p>

## 〈学生のことば〉

・ 学校にアーティストが行くことで、子ども達に普段の授業で味わうことができない体験（をさせてあげること）ができることは素晴らしいと思いました。東京以外にも、このような活動が広がっていくと良いと思います。

（昭和／アートマネジメント／4 年）

・ エイジスのワークショップは、音楽療法の現場とすごく似ていると思った。「音楽は言語に偏らないコミュニケーション」とはまさにその通りで、

そんな音楽を使うからこそ、そこで生み出せるもの・育めるものがあるのだと改めて「音楽」の力の大きさに気づけた。（昭和／音楽療法／1 年）

・ ワークショップについて、まだ漠然としたイメージのようなものしかなかったのですが、今回の講座で少し自分の中で明確になったかなと思いました。将来プレーヤーを目指しているので、自分もこのような活動に関して様々なことを考えていかなければいけないと思います。

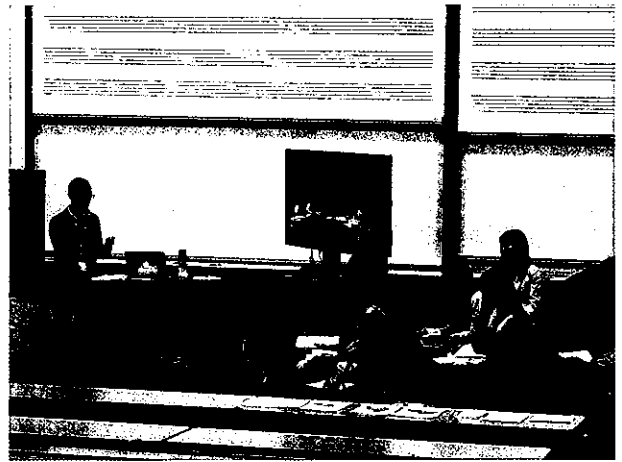
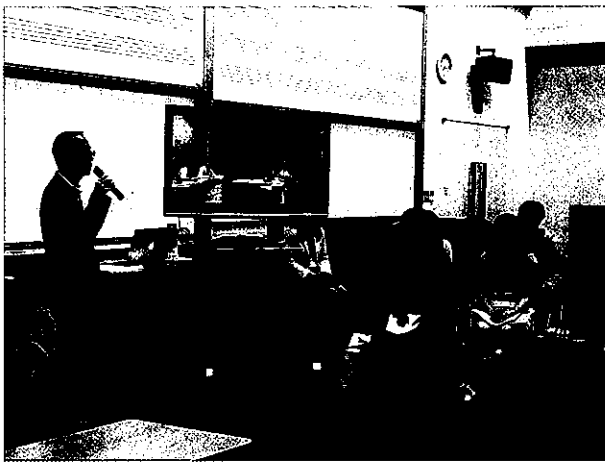
（昭和／オーボエ／短大 1 年）

- ・今回の講義でワークショップをやる上でのとても重要なこと、意味、考え、などが分かりました。人と違う良さが環境によって違うと思うので、見つけられるようになりたいです。もっとたくさんの発見をできるようにたくさんの人と関わりを持つようにしたいです。（東京／ピアノ／1年）
- ・エイジアスの子どものためのワークショップについて、どんなふうに行っているのか、画像・動画付きで教えてくださり、とてもわかりやすかったです！児童施設へ赴く意味と必要性も深く考えさせられました。（東京／作曲／1年）
- ・教員をやっている友達がたくさんいるので、こういう活動をたくさん紹介したい！と思った。楽しそうだから。（東京／声楽／3年）
- ・アーティストと子どもや学校をつなぐ役割をしている人がいることを初めて知りました。紹介のビデオでみた昔の時代、土器などを使って劇を作る内容ののを見ましたが、子ども達が自由で楽しそうにしているのが印象的でした。ただの学校の

授業では受身になりがちな子でも自発的に行動しやすいのってWSの魅力だなと思いました。また、そのためにファシリテーターやリーダーは参加者に強制的なイメージを感じさせてはいけなし、相手の興味や好奇心で引き付けられるようにできたらいいなと思いました。

（神戸／ピアノ／2年）

- ・現代を生きる子のために創造性を育み、子ども達がそれぞれ持つ考えを音や身体で表現させることが大切だと思います。DVDでも子どもが生き生きして、私の知っているはずの「現代っ子」じゃない！といい意味で裏切られました。（神戸／声楽／2年）
- ・アーティストが子どもの面白い所を引き出せるかが大切とおっしゃっていた通り、自分自身子どもの良い所を見つけ引き出していけるような人になりたいと思いました。子どもと接することが好きなので今後何かしらの活動に携われたらと思いました。（神戸／ピアノ／2年）



※写真は昭和音楽大学での様子です。



## 平成 26 年度 第 4 回「ミュージック・コミュニケーション講座」

講座の名称	第 4 回ミュージック・コミュニケーション講座 「音楽は心で聴けば解るモノ？」
講 師	茂木大輔（NHK 交響楽団首席オーボエ奏者）
実施日時	2014 年 7 月 9 日（水）18：30～20：00
実施場所	昭和音楽大学 南校舎 C511 階段教室
講座の概要	<p>第 4 回目の「ミュージック・コミュニケーション講座」は、昭和音楽大学からの発信で、NHK 交響楽団首席オーボエ奏者で指揮者としても活躍されている茂木大輔氏を講師として実施した。今回の講義は、茂木氏の演奏家・企画者・解説者・指揮者としての様々な体験をふまえ、音楽、社会、音楽家の関係についてをメインテーマとした。茂木氏は「音楽は心で聴けば解る、という説は根強く、芸術によけいな解説をすることはよくないと考えられる事も多い。しかし一方で、教会音楽や交響曲などは、現代日本の日常生活とはかけはなれた精神風土、生活基盤、思想の上に成り立っている作品も多く、音現象だけでその感動のすべてが理解できているとは言い難い」という考えを投げかけた上で、試行錯誤をしながら解説コンサートを続けている体験等を中心に話をされた。</p> <p>講義のはじめは、講師自身の自己紹介も兼ねて、ドイツにて教会音楽に触れた体験についての話があった。続いて芸術を解説することの意義について、モーツァルト作曲のモテット「アヴェ・ヴェルム・コルプス」を例として、同じ時代の美術作品を見ながら、また曲の解説を聞く前と聞いた後に印象がどう変わるかを受講生に体験してもらった。解説がない段階で学生に自由に意見を出してもらい、茂木氏の解説後に再度譜面と歌詞対訳を見ながら聴いてもらった。学生たちは、教会音楽等には解説をすることにより曲の聴き方と理解が深まることを実感していた。</p> <p>次に、茂木氏の演奏家としての観点から、三鷹市芸術文化センターでの「オーケストラ人間的楽器学コンサート」の企画について、さらにオーケストラの指揮者を目指すことになった経緯についてお話があった。指揮者としても解説コンサートを実施しているが、成功・失敗を繰り返しながらの体験談や、音楽家としての苦悩についても触れられ、トップレベルのプロの音楽家として活動すること、またレベルを維持することの難しさを語った。最後は、学生からの質疑応答で締めくくられた。</p>

### 〈学生のこぼ〉

- ・これから音楽をやっていくにあたって、プロの演奏家として成功するためには、練習して良い演奏をすることも大事だが、それにプラスして、音楽を聴いてくれる人に対してどのようにして、どのような影響を与えるのかということを考えていくことも大事なのだということが分かった。そして、人とのつながりということを大切にしながら様々なことを経験していきたいと思う。（昭和／オーボエ／短大 1 年）
- ・茂木先生が「音楽家としての成功は、リンクを広げていくことだ」とおっしゃっていたのが、いかに本当であるのか、茂木先生の経験談から感じることができた。（昭和／音楽療法／1 年）
- ・興味を持ったことや気になることに挑戦する、やってみるという姿勢を感じました。また、曲の音楽の深いところまで知る、解説を通して学ぶこ

とで、新たな曲の魅力を発見することができるので、とても良いことだと思いました。

(昭和／アートマネジメント／4年)

- ・オーケストラのお話からオーボエ奏者、指揮者の立場から普段聞けないことをたくさん伺えました。音楽でどのように表現するべきか確信のようなことを学べたと思います。この話は絶対に忘れずに将来自分も良い演奏家になりたいと心から思いました。(東京／作曲／1年)

- ・音楽をやるうえで最も大切なことを学べた気がします。モーツァルトの曲、意味が分かったら涙が出そうなくらい感動しました。

(東京／ピアノ／1年)

- ・友達を大切にして、楽しく音楽をしていくのが今、一番すべきことなのかなと思います。まず始めにできることだと思います。知識も増やして幅広く音楽したいです。(東京／ピアノ／1年)

- ・演奏家としてやっていくための非常にためになる話が聞けたと思います。どのような意志でやって

いくか、どのようなコンサートをしたか、それを何故したかなど、非常に興味深い話ばかりでした。しかし、その中にもちゃんと自分がやりたいようにやっていると感じたので、すごいなと尊敬しました。自分がやりたいことと、相手の求めることが一致するというのは、なかなかないと思います。

(神戸／ピアノ／2年)

- ・オーボエ奏者としての顔と指揮者としての顔はまた別にあってそれぞれ要領よくこなし、成功させるためには、出会う人たちの大切さが必要なのだと思います。自分をよく理解してくれる人や説得してくれる人との縁を大事にし、自分を生かせるようにしていきたいです。

(神戸／ピアノ／2年)

- ・最後の方で仰っていた人間関係の大事さを考えていきたいです。人と人とのつながりは、自分だけががんばってもどうにもならないし、相手を思いやる気持ちが大事だと思います。自分は音楽をやっていることを応援してくれる仲間や家族に感謝の気持ちを忘れず、これからもがんばっていこうと思えました。(神戸／ピアノ／2年)



※写真は昭和音楽大学での様子です。

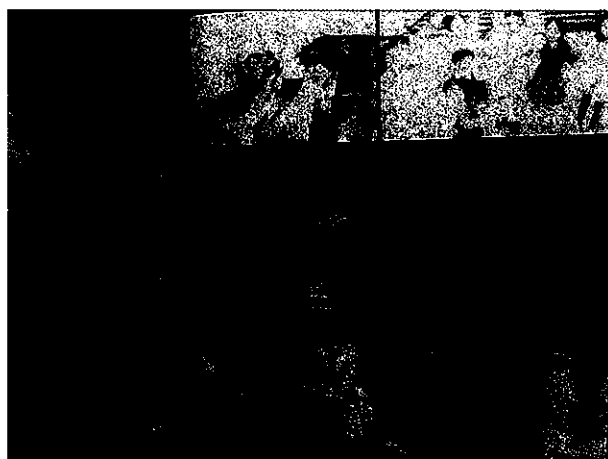
# 平成 26 年度 第 5 回「ミュージック・コミュニケーション講座」

講座の名称	第 5 回ミュージック・コミュニケーション講座 「Playful Learning ～ミュージック・ビデオをつくろう～」
講 師	上田信行（同志社女子大学教授）
実施日時	2014 年 10 月 8 日（水）18：30～20：00
実施場所	神戸女学院大学音楽学部オルチン館 合奏室
講座の概要	<p>第 5 回講座は、同志社女子大学現代社会学部こども学科教授の上田信行氏をお招きして行われた。リアルタイム・ビデオ作成のため、上田氏のゼミの学生 2 名も来校した。</p> <p>今回の講座では、世界中でミュージック・ビデオの作成が人気となっているファレル・ウィリアムズ Pharrell Williams の「ハッピー HAPPY」という曲にダンスや音楽をつけると共に、講座とその準備中に撮影した映像をリアルタイムで編集して、ミュージック・ビデオを作成するという取り組みを行なった。</p> <p>まず講座の流れを説明した上で、早速映像作りに取り掛かった。音楽にのせてステップを踏んだり、楽器を演奏したりしている姿をエアーで表現したり、画面の前で「ハッピー」と言いながらジャンプをしたり、様々な動きのヴァリエーションを何度も繰り返して撮影した。受講生たちは、最初は戸惑っているようで動きも小さかったが、各大学共どんどん動きが大きくなって表情も柔らかくなっていった。神戸女学院大学では生演奏を加え、東京音楽大学と昭和音楽大学は受講生同士で相談しながらよりおもしろい動きを取り入れていった。ミュージック・ビデオを作るだけでなく、コミュニケーションを取りながら一つのものを作り上げるためには、自分自身がどのように画面に映っているか、魅力的に振る舞うことができているかななどを客観視しなければいけないこと、そのためにはどんなスキルが必要かを、講師は学生たちに伝えていた。</p> <p>映像を撮り終えた後、編集作業を行っている間に、事前に用意していた配布物から、受講生各人が一番心に残ったフレーズを用紙にカラーマジックで色とりどりに書き出し、発表しあった。「恋におちてしまうような学び」「ここには自分の知らない世界がある」「可能性は憧れによって鍛えられる」など、印象的な言葉が多数挙げられた。</p> <p>講師からも、「Give P's a chance」という創造的な学びを達成するためには“Project”“Peers”“Passion”“Play”の 4 つの P が必要だというフレーズが紹介された。ここには「プロジェクト Project」を何のために行っているのかを考え、同じ目線を目指す「仲間 Peers」と同じ「情熱 Passion」を持ちながら「挑戦 Play」していくことで、創造的な学びが実現するという思いが込められている。このフレーズから、上田氏は音楽も目的を失い、楽しむ“Passion”を忘れてしまうといけない、思いっきり音楽をすることで創造的な活動ができると述べた。</p> <p>最後に完成した「ミュージック・ビデオ」を鑑賞した。これは講師が普段のゼミで用いている「リアルタイム・ドキュメンタリー」の手法で作成したもので、3 分ほどの映像の中に、講座内で演奏したり踊ったりした様子がコンパクトに盛り込まれている。短時間で完成した映像に驚いたようで、学生の反応も大きかった。映像には本講座の充実度がよく現れており、楽しい雰囲気を残しつつ終了した。</p>

## 〈学生のこぼれ〉

- ・ 講座が始まる前から、部屋が楽しそうな雰囲気に包まれていました。先生も優しくユニークな方でおもしろかったです。ミュージック・ビデオを作るということで本当にできるのか不安でしたが、音楽や動きをしていく内に不安が消えて、もっとやってみたいと思いました。終始楽しめました。  
(神戸／ピアノ／2年)
- ・ 今回の講座はいつもより自由な雰囲気が印象的でした。「MVをつくろう」というタイトルは知っていましたが、正直始めは何をするのか分かっていませんでした。しかし、上田先生に言われるがままピアノを弾いている内に自分がすごく楽しんでいて驚きました。できたMVを見た時は皆が楽しそうでした。可能性は憧れによって鍛えられる」という先生の言葉が印象的でした。憧れる気持ちによって可能性はいくらでも広がっていく、そう思うと努力することができるし、これからの自分にも希望が持てます。考え方が変わった気がして、いい経験になりました。  
(神戸／ピアノ／2年)

- ・ 生放送でミュージック・ビデオを作るということで、体を使った講義でした。音楽について再確認できたし、よいビデオを作れてよかったです。  
(昭和／声楽／1年)
- ・ 3 大学がそれぞれ音楽にのって楽しめて、とてもよかったです。  
(昭和／音楽療法／1年)
- ・ ミュージック・ビデオを撮るよ！と最初に言われて、とても困惑してしまいましたが、カメラに慣れてみんなのアイディアも出てくると、とても楽しく参加できました。大げさにすることで、さらに完成した時によりものになることを学びました。  
(東京／ピアノ／1年)
- ・ 音楽は人を笑顔にするという基本的なことを思い出しました。根本的なことを見直そうと思いました。  
(東京／ピアノ／1年)



※写真は神戸女学院大学での様子です。



## 平成 26 年度 第 6 回「ミュージック・コミュニケーション講座」

講座の名称	第 6 回ミュージック・コミュニケーション講座 「即興・遊び・作曲 音楽とコミュニケーション」
講 師	野村 誠（作曲家）
実施日時	2014 年 10 月 29 日（水）18：30～20：00
実施場所	東京音楽大学 A 地下 100 教室
講座の概要	<p>「ミュージック・コミュニケーション講座」第 6 回は、作曲家として多様なワークショップ・アウトリーチ活動をされている野村誠氏を講師に迎えて、東京音楽大学にて実施・発信した。</p> <p>講義の冒頭は、鍵盤ハーモニカを使いながら語り歌い調の自己紹介と楽器紹介で開始した。ここからすでに、クラシック系の音楽世界に慣れ親しんでいる学生は度肝を抜かれたかもしれない。鍵盤ハーモニカは「人がやらないからメインの楽器として使い始め」、コカコーラの空ペットボトルは「軽くて持ち運び可能で低音の出る打楽器」であるとの説明により、野村氏の自由な発想と視点が示された後、現在の活動の紹介に移った。</p> <p>紹介された活動は①千住だじゃれ音楽祭、②瓦の音楽、③音楽創造による若者の就労支援プロジェクトの三つである。①では、言葉遊びや体の動きを音楽に結びつける試みや瓦や竹輪を楽器に用いる柔軟な発想、1010 人の参加者をリードするワークショップのあり方、②では地場産業の瓦を用いた音楽づくりの仕掛け、③では求職中で引きこもりがちな若者とオーケストラメンバーとが楽器演奏・創作のワークショップを重ねて作品発表に至った経緯が紹介され、あらゆるものをヒントに音楽を生み出す発想力、音大生が外の世界の人と接点をもつことの重要性が強調された。</p> <p>講義の後半は即興演奏となり、</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>a) 画面を通じて 3 大学の参加者が一人ずつ順番に楽器を鳴らしていく</li> <li>b) 3 大学の全員がそれぞれ、手を打つ、声を出す、楽器を鳴らすことに波状的に変移しながら一つの曲を作る</li> <li>c) 各大学で即興演奏し、その題名を他大学の学生が考え、その題名に合わせて再度即興演奏する</li> </ol> <p>ということを体験した。</p> <p>最後の質疑応答で学生から出た質問への回答の中では、たとえ 1010 人をリードする場合であっても決して独裁的に人を従えるのではなく、多少経験のある人を小グループのリーダーにする等して参加者にグループ意識とイニシアチブを与え、その中で人々が作り出す音楽のおもしろさを感じること、すなわち作曲者が指定したものを演奏者が演奏するのではなく、作曲家が提示した素材を多様な人々が加わることによって変化させながら創りあげていくことのおもしろさが強調された。</p>

### 〈学生のことば〉

- ・鍵盤ハーモニカが印象的でした。身近にあるものでこんなにも音が作れてすごいなと思いました。ペットボトルは衝撃的でした！！合奏してみたい！！  
(東京／ピアノ／1 年)

- ・色々な音楽の表現があって本当に面白かったです。楽器を使っているとやっぱり楽しむことができて、これならみんなにも興味を持ってもらえと思いました。  
(東京／ピアノ／1 年)

- ・ 色々なワークショップのアイデアがあるのだなと感じました。(東京／ピアノ／4年)
- ・ 鍵盤ハーモニカの新奏法の発見がありました！小さなマテリアルを発展させて、1つの楽曲にする手法が少し分かった気がします！もっと参加者の自主性を引き出せるリーディングを見つけたいです！(東京／ピアノ／4年)
- ・ 皆があまり興味を持たないものにチャレンジすることに、心をひかれました。だじゃれ（と重ねる）というようなユニークな曲を作曲なさっていて、とても面白かったです。(昭和／音楽療法／1年)
- ・ 瓦の音が思っていた音と全然違い、びっくりした。思っていたよりもかわいい音がした。普段一緒に音楽をやらない人たちが一緒に音楽をするということについて、考えさせられた。(昭和／オーボエ／1年)
- ・ 即興演奏については以前から興味がありましたが、なかなか難しいものと思っていて、特に活動に活かす等ではできませんでしたが、今日の講義を聞いて、そこまで難しく考えずに自分のしたいことをそのまま音にすることが大切なのだということが分かりました。(昭和／オーボエ／短大1年)
- ・ 3大学の授業ということで、3つの大学をつないで演奏できたのが楽しかった。(昭和／アートマネジメント／3年)

- ・ 野村先生の世界にあつという間に引き込まれました。まず鍵盤ハーモニカのイントロダクションから始まりましたが、今まで見たことのない奏法、音の出し方に目が離せませんでした。「誰もが知っていて使ったことがある楽器なのに専門に学んでいる人はほとんどいない。だったら僕が、と思った。」と先生が仰っていて、とても素敵だなあと思いました。誰もしていないことは、誰もまだその魅力や可能性を発見していないことでもあると思います。でもだからこそ今まで誰も知らなかった面白さ、楽しさがあるんだとわかりました。瓦やだじゃれのような身近にあるもの何でも、よく見れば多くの可能性を感じることができる、ということに気づくことができた講座でした。

(神戸／ピアノ／2年)

- ・ 明るい先生で楽しかったです。インターネットでつないでいる人たちと一緒に楽器を演奏したのが印象に残っています。また、鍵盤ハーモニカでの演奏や、ペットボトルの演奏も衝撃的でした。ペットボトルは是非今度やってみようと思いました。野村先生の色々な作品が聞けてすごく楽しかったです。

(神戸／ピアノ／1年)

- ・ 先生がとても個性的な方で、テンションについていくのが結構大変でした。鍵盤ハーモニカをたくみに扱い、ハーモニカが先生の手と一体化しているのではと思う程でした。あんな風に自由自在に鍵盤ハーモニカを操ってみたいです。

(神戸／ピアノ／2年)



※写真は東京音楽大学での様子です。



# 平成 26 年度 第 7 回「ミュージック・コミュニケーション講座」

講座の名称	第 7 回ミュージック・コミュニケーション講座 実習報告会（神戸女学院大学）
発表者	神戸女学院大学学生 5 名
実施日時	2014 年 11 月 12 日（水）18：30～20：00
実施場所	神戸女学院大学音楽学部 合奏室
講座の概要	<p>2014 年 9 月 24 日～27 日に神戸女学院大学で実施した音楽ワークショップ（28 頁参照）特別研修について、この研修に参加した本学の履修生が発表を行った。</p> <p>4 日間の研修について、各日のアイス・ブレイクやグループワークの内容、時間配分などを報告して、自分たちの学びを振り返った。その際、参加者アンケートの内容を紹介したり、重要な部分を抜き出した映像を使ったりして発表が進められた。アイス・ブレイクの手法を説明した上で、各大学で実際に身体を動かしてやってみる時間も設けられた。</p> <p>発表した学生は、資料を作成したり映像を使いながら話したりするのが初めてというメンバーもいて、説明するむずかしさを感じたようだったが、それだけに今後どうすれば円滑に発表できるかを考える良い機会になった様子であった。</p>

## 〈学生のこぼ〉

・昭和でやっていたこととは全然違うことをやっていておもしろかった。最初に聞いた時は、自分たちで作った曲だとは思わなかったのでびっくりしてすごいと思った。制作過程を聞いて、ああ、なるほどこういうふうにするのか、おもしろいと思った。変拍子の曲を、小さい子たちも普通に歌っていてすごいと思った。

（昭和／オーボエ／1 年）

・初めて発表する側に回り、どんな風にしゃべれば伝わるのか、円滑に進めるのがむずしかったです。発表の時に、想像していたよりうまくできなくて反省しています。やはり、発表する時の相手の人数や状況を把握することは重要だと思いました。個人的には、しゃべる時に原稿を読む形になってしまったのも伝えられなかった原因だと思います。相手に伝えようという意識が大事だと思います。

（神戸／ピアノ／1 年）





## 平成26年度 第8回「ミュージック・コミュニケーション講座」

講座の名称	第8回ミュージック・コミュニケーション講座 実習報告会（東京音楽大学）
発表者	東京音楽大学学生 3 名
実施日時	2014 年 12 月 3 日（水）18：30～20：00
実施場所	東京音楽大学 A 地下 100 教室
講座の概要	<p>2014 年 7 月 22～23 日に区民ひろば南池袋で実施したワークショップ(20 頁参照)と、9 月 23 日に東京音楽大学で実施した特別セミナーとワークショップ (22 頁参照)について、参加した学生が原稿と映像資料・配布資料を準備して報告を行った。</p> <p>今回の発表者はワークショップ・リーダーをまだ務めたことがなく、実際のワークショップでは記録係や補助を務めた学生であったため、全体をまとめて報告する方向性を決めることに苦勞した。同じワークショップやセミナーであっても必ずよかった点と悪かった点があり、それをどう強調するのかによって報告のトーンに違いが生ずる。学生たちは、同じものを見る場合でも視点によって多様な捉え方が可能であることを学び、自分たちが感じた問題を言葉で表現し問題提起する難しさを体感する初めての機会となった。</p>

### 〈学生のこぼれ〉

- ・自分の意見をちゃんときはきと言えていたの  
で、皆、ワークショップの趣旨をよく理解してい  
るなと思った。私はまだよく理解できていないみ  
たいなので、東京音大の人のエネルギーに圧倒さ  
れていました。（昭和／オーボエ／1 年）
- ・ワークショップに限らず、臨機応変にできるこ  
とは大切だと思った。東京音大さんの発表の仕方は  
計画的かつまさにそれ（臨機応変）が出来ていて、  
すばらしい！（昭和／音楽療法／1 年）
- ・着眼点の違いがおもしろいなと思いました。ひ  
とつひとつしっかりと掘り下げていていいと思  
いました。テレーザとヒールの東京でのワーク

ショップは、できあがった曲も神戸とは長さや雰  
囲気が全然違いました。映像を見ていて一体感（み  
んなでいっしょに音楽をつくっている感じ）があ  
まり伝わってきませんでした。東京音大の何人か  
の方が「つまらなかった」「暗い音楽でなんか・・・」  
とネガティブな印象を抱いたようですが、そうい  
う気持ちは少なからずその場の空気、参加した子  
どもたちにも影響するのでは？と思います。音楽  
の楽しさと一緒に普段とちがう何かを見つけられ  
ることも魅力だと思うので、それを聞いてさみし  
さを感じました。ただ、その経験をいかして、私  
だったら～と考えられるのがいいなと思いまし  
た。また次の報告があればぜひ聞きたいです。

（神戸／ピアノ／2 年）



## 平成 26 年度 第 9 回「ミュージック・コミュニケーション講座」

講座の名称	第 9 回ミュージック・コミュニケーション講座 実習報告会（昭和音楽大学）
発表者	昭和音楽大学学生 6 名
実施日時	2014 年 12 月 10 日（水）18：30～20：00
実施場所	昭和音楽大学 C511 階段教室
講座の概要	<p>2014 年 9 月 17 日および 9 月 24 日に昭和音楽大学で実施した実践活動（24 頁参照）について、参加した学生（本科目履修者・登録者）による報告を行った。</p> <p>ワークショップ・ファシリテーター経験者で、今回の実践活動のリーダーを務めた学生（アートマネジメントコース 4 年）による趣旨説明ののち、その他の参加学生より、2 日間の実践活動のスケジュールと内容について、映像や写真を交えて説明がなされた。また、実践活動で行ったアイスブレイクを、実際に 3 大学全員で体験した。</p> <p>最後に、実践活動の経験を今後にどのように活かしたいと考えているか、参加学生が各々自分の意見を述べ、報告を終えた。実践活動への参加のみならず、報告に向けた準備や他大学の学生に報告するという経験も、参加した学生にとっては有意義であった模様である。</p>

### 〈学生のこぼ〉

- ・今回、準備期間の少ない中で発表するということで、それぞれで役割分担をし、内容を考え、最終的に東京音大、神戸女学院の学生さんにも興味を持ってもらうことができたので、良い発表になったと思います。（昭和／オーボエ／短大 1 年）
- ・自己紹介ゲームがおもしろかったです。他大学の受講生のことをほとんど知らないのを見ていて楽しかったです。カウントゲームをしたり、アイスブレイクをみんなでしたりしたことによって、場

の空気が和んでよい雰囲気になったなあと思いました。昭和音大のどなたかが仰っていた、WS を行う側が信頼し合っているか、十分な準備ができているか、そういったものが WS に影響してくるという考え方に共感しました。また、今回は先輩方がおおよその枠組みを決めたそうですが、経験はすごく力になっていくのだと思いました。私は、WS を始めて少ししか経験がありませんが、いつかは先輩方のように想像性豊かな WS が行っているようになりたいです。（神戸／ピアノ／2 年）



## 平成26年度 第10回「ミュージック・コミュニケーション講座」

講座の名称	第10回ミュージック・コミュニケーション講座 3大学合同での総括
講師	各大学担当者：武石みどり（東京音楽大学）、武瀧京子（昭和音楽大学）、 津上智実（神戸女学院大学音楽学部）
実施日時	2015年1月14日（水）18：30～20：00
実施場所	各大学教室：東京音楽大学 A 館地下 100 教室、昭和音楽大学南校舎 C511 階段教室、 神戸女学院大学音楽学部合奏室
講座の概要	<p>今年度のミュージック・コミュニケーション講座の最終回として、3大学の学生と教員による総括を次のような流れで行なった。</p> <p>1) 「逆転時間」の作品発表：前回（第9回）の昭和音楽大学の発表の中で他大学の受講生の反応が最も大きかった「逆転時間」のプログラムを、他の2大学でも実施してそれぞれ作成した作品を映像として流して発表した。東京音楽大学はギャグとパンチの効いた作品、神戸女学院大学はショートショートシリーズという形態であった。昭和音楽大学の作品も再度上映された。各大学の学生のカラーが滲み出ていて、大学による文化の違いを感じさせる点でも興味深かった。</p> <p>2) 「逆転時間」発表作品に関するディスカッション：制作の狙いや過程について各大学の学生たちが説明し、相互に質疑応答が行なわれた。昭和音楽大学の場合はワークショップの一部として活用したものであり、他の2大学は単独で取り組んだものであり、その違いを踏まえることは大事というコメントも出された。</p> <p>3) 東京文化会館プロジェクトの報告：東京文化会館が昨年度に続いて実施したポルトガルのカーザ・ダ・ムジカのプロジェクトについて、受講した東京音楽大学の学生が発表を行なった。映像をふんだんに活用したパワーポイントによる発表で、プロジェクトの魅力と可能性がよく伝わってきた。他大学の受講生の関心も高く、活発な質疑応答が行なわれた。このプロジェクトでは、乳児向け、4～6歳向け、小学生以上を対象にした3種のワークショップをグループで制作し、それを2月に発表する予定とのこと。紹介されたカーザ・ダ・ムジカのモットー「ワークショップはワークショーであれ」「ワークショップは教える場ではなく、分かち合ったり共有したりする場である」「ワークショップは参加者に種をまくことである。その成果はいつ現れるかわからない」も印象的であった。</p> <p>4) 全体の振り返り：3大学の受講生各人が、今年度の講座全体を振り返って心に残ったことを発表し、各大学の担当教員がコメントを行なった。</p> <p>最後に今年度の「効果測定シート」への記入の時間を設けた。</p>

### 総括

今年度のMC講座では、ワークショップの学習論に加えて、さまざまな芸術分野のアーティストによる実践について学ぶ講義が展開されて、受講生には分りやすくかつ刺激的な講座となった。また各大学がそれぞれワークショップ研修を実践し、その成果を互いに発表し合うことで、ワークショップの多様な可能性と共通する問題点とが浮き彫りになったのも大きな成果と言える。従来、放課後の遅い時間帯（18時半から20時まで）に講座を実施してきたが、来年度は日中に実施する方向で調整を進めており、受講生の増加が期待される。今後も、3大学で知恵と力を合わせて、新しい音楽教育の可能性を考えていきたい。

（津上智実）



# 音楽ワークショップ「みないけ キッズアーティスト『リズム・リズム・リズム』」

平成 26 年度 実習報告 (東京音楽大学)

事業名称	音楽ワークショップ「みないけ キッズアーティスト『リズム・リズム・リズム』」
実施日時	2014 年 7 月 22 日 (火) 13:00 ~ 15:00 2014 年 7 月 23 日 (水) 13:00 ~ 15:00
実施場所	区民ひろば南池袋
共催	東京音楽大学 3 大学連携センター、豊島区立地域区民ひろば南池袋
対象	豊島区在住・在学の小学生 (参加者数 22 名)
参加者数	東京音楽大学 11 名、神戸女学院大学 3 名、昭和音楽大学 1 名 外部参加者 5 名、小学生 24 名 (22 日のみ)
ワークショップ・リーダー	磯野恵美 (卒業生)・坂本夏樹 (院 2 年)・大西小百合 (4 年)
筆記記録	佐藤礼奈 (4 年)、櫻井早苗 (4 年)、古田ひかる (2 年)
映像記録	金田紋 (3 年)、佐藤遥 (2 年)、畑中茜 (2 年)、新島綾 (1 年)
補助	阪井結衣 (2 年)、佐藤由佳 (2 年)、橋本滯 (2 年) 大出あすか (1 年)、江本純子 (聴講生)

## 〈事業概要〉

夏休みに入ったばかりの小学生を対象に、2 日連続でワークショップを行った。昨年度複数の学生と教員が参加したカーザ・ダ・ムジカのワークショップ (東京文化会館におけるワークショップ・リーダー育成プログラム) を参考にして、ワークショップの内容を組み立てた。

事前の授業では、導入 (アイスブレイク) に用いるボディーパーカッションやゲーム、リーディングの方法について繰り返し学び、また即興演奏の方法についても実践練習を重ねた。事後の授業では、ワークショップの記録の作成、報告書の作成と口頭報告の原稿と資料づくりに取り組んだ。

### ◆ 7 月 23 日

\* アイスブレイク…15 分

- ・ 名前のコール & レスポンス
- ・ 既存の楽曲に合わせて歩くゲーム
- ・ リーダーの叩くリズムまね

\* Cup Song…60 分

- ・ リーダーのパフォーマンス
- ・ 基本動作を学び、リズムに合わせてカップを配る
- ・ カップを使ってリーダーの叩くリズムのまね
- ・ 歌を教える

・ カップのリズム、歌を組み合わせせて合奏

### ◆ 7 月 24 日

\* アイスブレイク…50 分

- ・ グループ分けゲーム
- ・ リーダーのリズムのまね
- ・ カップを使って 1 日目の復習 (リズム、歌)

\* 楽器を持って…60 分

- ・ みんなで長い音、短い音をリーダーの合図で鳴らす
- ・ みんなでダイナミクスを付けて鳴らす
- ・ 楽器の種類ごとに鳴らす
- ・ リーダーの合図で楽器、歌を組み合わせせて合奏

## 〈学生のことば〉

・ 今回私は主にリーダーのサポートをしましたが、最初は何をすればいいのかいいのか分からなくて指示を待つだけでした。しかしリーダーを務めた先輩が音楽でしっかり皆をリードしていたので、ワークショップ・リーダーがどのようにリードするのか、それが客観的にみてどう見えるのか等、自分の中で考えることができて勉強になりました。

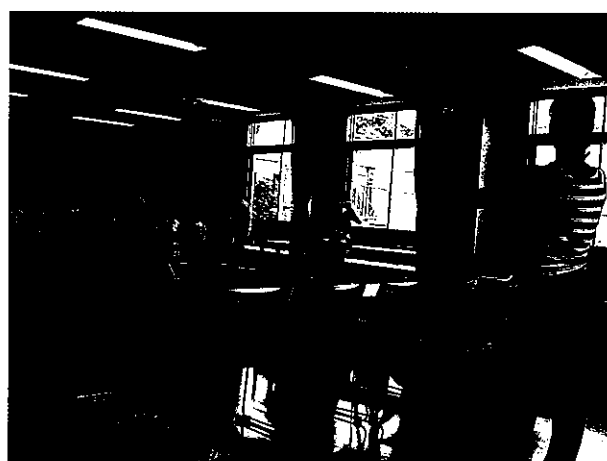
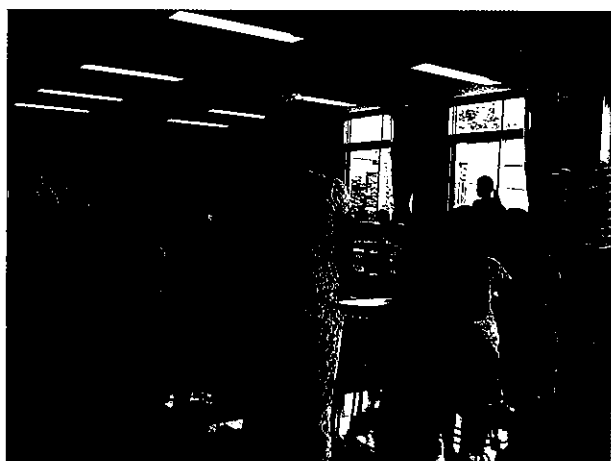
・ 楽器のワークは、できあがった音楽を演奏するの

ではなく音をただ出しているだけなのに、子ども達と一緒に演奏できて新鮮な気持ちになり、またやりたいなと思いました。子ども達も「楽しかった、またやりたい!」と言ってくれたので、今回のワークショップは成功したのではないのでしょうか。

- ・ たまに、なぜこのワークをやっているのかと思うことがありました。それはたぶん目的が明確に感

じられないからだと思います。もちろん、何が起るかわからないから楽しいという面もあります。でも、ちゃんと頭で考えながら行うことも大切だと思いました。

- ・ 何よりも、協力し合い、音楽を楽しむ、体が自然に音楽に乗って動くことが一番大事だと感じました。



ワークショップの様子



# 東京音楽大学MC講座特別セミナー及び音楽ワークショップ

平成 26 年度 実習報告 (東京音楽大学)

事業名称	ミュージック・コミュニケーション講座 特別セミナー 音楽ワークショップ「みないけキッズアーティスト『リズム×うた×リズム』」
実施日時	2014 年 9 月 23 日 (火・祝)
実施場所	東京音楽大学 A 館
主催	東京音楽大学 3 大学連携センター
後援	豊島区
講師	テレザ・カンボス、ヒール・ビュッシュェ
参加者数	昭和音楽大学学生 (1 名) 神戸女学院大学スタッフ (2 名) 一般希望者 (4 名) 小学生 (13 名参加)

## 〈事業概要〉

7 月に区民ひろば南池袋でワークショップを実体験したことを踏まえて、9 月の特別セミナーにおいては、①一般参加者を含めた多様なメンバー構成の中でワークショップを体験する、②講師の提示する方法と自分たちが開発した方法を組み合わせることを試みる、の 2 点を目的とした。

講師として迎えたギルドホール音楽演劇学校リーダーシップ修士課程修了生には、うたづくりによるワークショップの方法論を提示していただき、7 月のワークショップで実施したカップによるリズム遊びと組み合わせた。部分的に通訳を入れてのセミナーであり時間的な制限もあって、学生たちは言語によるコミュニケーションの点でも困難を感じる場面があったが、皆が主体的に関わる経験を共有していたため、最後のディスカッションは白熱した実り多いものとなった。

## ◆ 9 月 23 日

10:00 ~ 12:00

### うたによるワークショップの方法論

ボディーパーカッションによる導入をかなり丁寧に行う。その後うたづくりの一方法として、立つ・膝をつく・座るの三種類の動作をド・ミ・ソの 3 音に当てはめ、参加者の動作の並びから旋律を導く方法が紹介された。後半は、東京音大の学生が 7 月に行ったワークショップ実習の中からカップソングの方法をデモンストレーションし、午後のワークショップの構成について相談した。

13:00 ~ 13:40

### 音楽ワークショップ メロディー創り

近隣の小学生 13 名を加え、実際に子どもを対象としたワークショップを行った。リーダーの動きを真似るアイスブレイクに始まり、午前中に紹介された方法により旋律づくりを開始。最初は姿勢の組み合わせにより、次に cis, d, e, f, g の 5 音のトンチャイムを持たせ、その人が取る動作に応じてリズムを決めることによって旋律を作った。できあがった旋律を皆で何度も歌ったのち、リーダーの一人が対旋律を即興し、2 グループに分かれて重唱する。音程的にはやや難しい旋律が出来上がった。

13:45 ~ 14:20

### 音楽ワークショップ カップ回しによるリズム作り

ここからはリーダーを東京音楽大学の学生 3 名に交替し、カップソングによる音楽ワークショップを行った。参加者は円になり、リズムをつけながらカップを隣に回した。最初はリーダーがリズムを提示したが、途中からは子供たちからリズムのアイディアが出始め、積極的にワークショップに参加する子供たちの姿を見ることができた。

14:20 ~ 14:40 作品のまとめ

ワークショップ前半で作ったうたと後半で作ったカップ回しのリズムを合わせ、一つの作品を作り上げた。この作業をする過程でも、子供たちから意見が出てきて、それらの意見を尊重しながら、リーダーが素材を組み合わせた。ワークショップの時間が短いため、リーダーやスタッフがある程

度作品の枠組みを決めなくてはならない場面が多々見受けられ、子どもたちのアイデアを引き出す余地はまだまだあると感じられた。

15:40～16:30

#### ディスカッション・総括

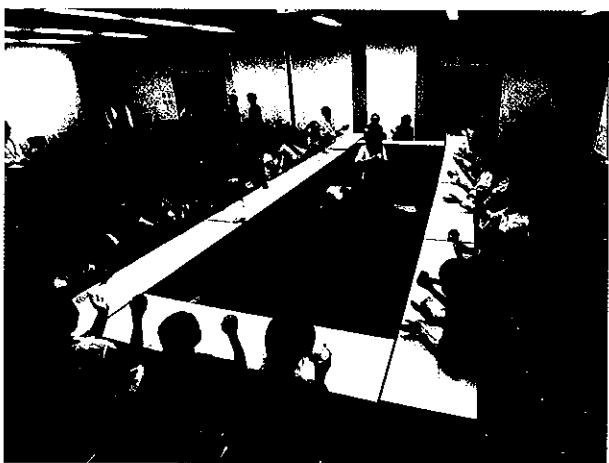
昨年度、一番の課題として上がったのは、自分勝手な行動をしてしまう子どもたちへの対応であった。しかし、今年度は、そういった子どもたちに対してもある程度ゆとりを持って接することができた。その理由としては、この講座を継続して受講している学生たちが予想外の出来事にも臨機応変な対応をとることができるようになっていたからである。「子どもが暴言を吐いたり輪から外れたり活動の邪魔をするとき、それは何かを表現するためにその行動を起こしている、彼らの行動を妨げてはいけない。」というテレザとヒールの言葉に、学生たちは深く共感している様子であった。

#### 〈学生のことば〉

・歌のリーディングの手法と心構え、その場で考え

続けてワークショップを進めていく姿がとても勉強になりました。

- ・体験したワークショップでは、参加者の導き方、参加者から出たアイデアの活かし方などを学べました。参加者を引きつけて飽きさせないためのコツも勉強になりました。
- ・できあがった音楽があまりに風変わりで、心からは楽しめなかった。
- ・音を良く聴いてワークショップを進めていく丁寧さを見て、自分には参加者の心に寄り添う感じがなかったと反省しました。
- ・用意していたものをとっさの判断で差し替える柔軟さに感動しました。
- ・今後の自分の将来に向けて、自分なりに変化をさせつつ、ピアノ指導、音楽指導、訪問演奏に活かしていきたいと思います。



ワークショップの様子



# ワークショップ作りに挑戦！

平成 26 年度 実習報告（昭和音楽大学）

事業名称	ワークショップ作りに挑戦！
ワークショップ ファシリテーター/ リーダー	工藤美咲、吉本昌史（いずれも昭和音楽大学アートマネジメントコース 4 年）
実施日時	2014 年 9 月 17 日（水）18:00～20:30、9 月 24 日（水）18:00～20:30
実施場所	昭和音楽大学 C511 階段教室
主催	昭和音楽大学コミュニケーションセンター
参加者数	9 月 17 日：ファシリテーター 2 名（工藤、吉本）、「音楽コミュニケーション①」履修者 3 名、同科目登録者 2 名、教員 3 名 9 月 24 日：ファシリテーター 5 名（工藤、吉本を含む）、「音楽コミュニケーション①」履修者 3 名、同科目登録者 1 名、一般参加学生約 15 名

## 〈事業概要〉

本事業は、2 日間の実践活動により、ミュージック・コミュニケーション講座（昭和音楽大学における科目名：音楽コミュニケーション①②）履修者・登録者が、ワークショップ・ファシリテーターを体験し、その役割について理解を深めることを目的として実施された。

1 日目は、ワークショップ・ファシリテーター経験を持つ学部 4 年の学生をリーダーとして、ファシリテーターに関する基本的な事柄を学ぶとともに、リーダーのもと、アイスブレイクやワークショップを体験した。2 日目は、1 日目の学びを踏まえ、履修者・登録者が自らファシリテーター役となって、一般参加学生を対象にワークショップ作りに挑戦した。

以下、2 日間の活動内容を紹介する。

### ◆ 1 日目：9 月 17 日

はじめに、実践活動の目的とワークショップの概要や考え方について、武濤教授およびリーダーの学生から解説が行われた。ミュージック・コミュニケーション講座において招聘しご講義いただいた荻宿俊文教授（青山学院大学）によるワークショップ理論を踏まえ、「ワークショップとは」「実際にワークショップが行われる場面」等について学んだ。また、リーダー学生のうち 1 名が受講、修了した「青山学院大学ワークショップデザイナー

育成プログラム<sup>1</sup>」の経験についても触れられた。

次に、実際にワークショップの体験へと移った。リーダー学生がファシリテーター役となり、最初に 2 種類のアイスブレイクを行った。ひとつは、参加者が一人一人自己紹介をしていき、次に自己紹介する人は、前の人の自己紹介の内容を受けたコメントをする、という「自己紹介ゲーム」である。これは、参加者同士が他の人の自己紹介を注意して聞き、それに応じたコメントをすることにより、参加者同士の仲を深めることがねらいとされている。ふたつ目は、他の人と重ならないようにタイミングを計って手を挙げ、数字を 10 まで数える「カウントゲーム」で、こちらはファシリテーターに必要な、場を見る感覚を持つことがねらいである。

アイスブレイク後、今回のワークショップの素材である「逆転時間」のワークに入った。「逆転時間」は、撮影した動画を逆再生で見ることができる iPhone のアプリである。まずは 2 つのグループに分かれ、このアプリを使って撮影し、「逆転時間」を体験した（体験）。使用方法を理解し、完成する動画のイメージを持ったのち、グループごとに工夫して撮影し、動画を見た（鑑賞）。それらについて、面白かったところ、つまらなかったところを考え、

<sup>1</sup> 青山学院大学が運営する社会人向け履修証明プログラム。カリキュラムを修了した者には、学校教育法にもとづく履修証明書「青山学院大学学校教育法履修証明プログラム修了認定ワークショップデザイナー」が発行される。同プログラムホームページ参照（<http://wsd.irc.aoyama.ac.jp/>）。

1人ずつ画用紙に書き出し、グループ内でシェアした（魅力の発見）。最後に、グループごとに画像を見せ合い、気づいた事をシェアした（作品共有）。

ワーク体験後、リーダーのもと、あらためてワークショップ・ファシリテーターの役割を考えながら、2日目に一般参加学生を迎えて行う「逆転時間ワークショップ」をどのように行うか、組み立てる作業が始まった。履修者・登録者の役割を、全体的なプログラムデザインを行う人（Aチーム）と、グループの活動を促進（ファシリテーション）する人（Bチーム）に分け、Aチームではアイスブレイクの進め方や、「逆転時間」の使用方をどのように説明するかを考えた。Bチームでは、グループ活動の時に起こりうることと、それに対する対処の仕方を考えた。

最後に、両チームで話し合った内容をシェアし、2日目に行うワークショップの全体的な流れを把握した。そして、ひとりひとり、今回参加した感想を述べ合い、1日目の活動を終えた。

## ◆ 2日目：9月24日

2日目は、冒頭の30分間、最終準備の時間を持った後、いよいよ一般参加学生を迎えてのワークショップ実施となった。本番の流れは以下のようなものである。

- ①アイスブレイク：全体（写真①）
- ②「逆転時間」の説明：全体
- ③活動Ⅰ：2つのグループに分かれて活動（写真②）
- ④中間発表：全体
- ⑤活動Ⅱ：2つのグループに分かれて活動
- ⑥作品発表会：全体（写真③）

上記、③の活動Ⅰは、「逆転時間」を試しに試してみる時間、⑤の活動Ⅱは「逆転時間」を使って各グループで作品作りをする時間である。履修者・登録者のうちAチーム（1日目参照）は①、②、④、⑥でファシリテーターを務め、その際Bチームは観察を行った。また、Bチームは③、⑤でファシリテーターを務め、逆にAチームが観察を行った。一般参加学生は、その場で初めてワークショップを体験したため、はじめはぎこちない様子が見られたが、次第に打ち解け、お互いに意見を出し合って積極的に作品作りに取り組むようになった。

本番後、休憩をはさみ、ワークショップのリフレクション（リフレクション①）を行った。「逆転時間ワークショップ」の流れを振り返り、参加者・

実施者・観察者のそれぞれの立場で感じた事を付箋に書き出した。書き終わると、2つのグループに分かれ、時間軸が書き込まれた模造紙上の当てはまる箇所に付箋を貼り、グループ内でシェアをした。さらに、全体でも、グループの代表者による発表でシェアをした。このリフレクションでは、ワークショップの中に見られる各人の考え方の多様性に気づくこと、そして自己原因性感覚を持つことがねらいであった。

一般参加学生の参加はここまでで終了し、その後、履修者・登録者とリーダーによるリフレクション（リフレクション②／写真④）を行った。全体の流れを振り返るとともに、「実践活動振り返りシート」に記入することで、今回のワークショップにおけるファシリテーターとしての自分を各自で振り返った。そして、その振り返りを全体でシェアした。

履修者・登録者は、全員初めてのファシリテーター経験となったが、ワークショップの進め方やファシリテーターの役割について、各々反省点を見つめつつ、理解を深めることが出来た様子であった。

## 〈学生のことば〉

### ●履修者・登録者

・ワークショップ自体初めての経験でしたが、今まで話したこともない方と1時間でこんなに共同作業を楽しくできるんだと感動しました。ファシリテーターのように、適度な距離感を保ちつつ進めていく感覚は、日常でもとても必要だなと思いました。（クラリネット／1年）

・「誰もが参加している意識を持てる状況」は「誰もが楽しめる空気を作れる状況」でもあるということを学んだ。ワークショップにしる、他の授業にしる、「全員が参加している空気」を作れる人物に自分がなれたらいいなと思う。

（音楽療法／1年）

・発言することが大事だと思った。その誰かの言葉によって、新たに意見が出たり、改善するんだなと感じた。これは、ワークショップだけではなく、日常生活でも友達や先生とコミュニケーションしてできると思うので、アイデアとかを思いついたら発言したいと思いました。（音楽療法／1年）

- ・周りの人や周囲の雰囲気などをよく観察することができて、この力というのはやはり日常でも大事になってくるものだと思うので、今回はとても良い経験になりました。（オーボエ／短大1年）

#### ●リーダー学生

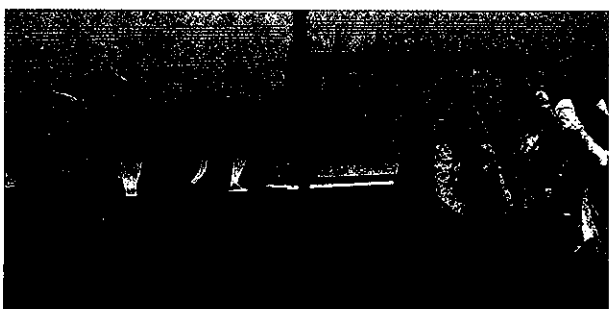
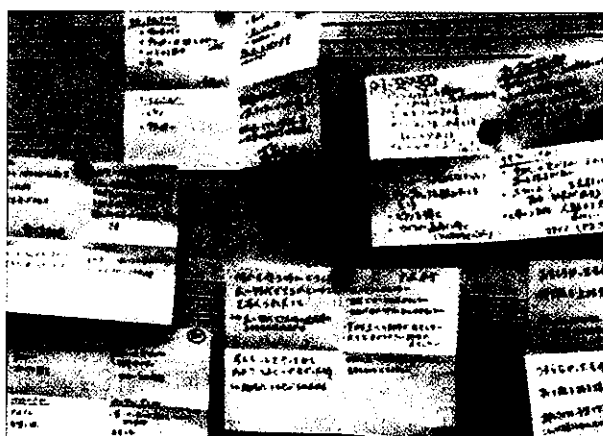
- ・プログラムデザインをする上で、参加者とプログラムのフィット感を見ていくのが難しく、良い経験

となった。自分のファシリテーターとしての能力に足りないところも多いので、勉強していきたい。  
（アートマネジメント／4年）

- ・ファシリテーター同士の意思疎通、特に時間管理には気をつけたいと思う。プログラムを作る上で意識すべきことが何かというものを体感できた。  
（アートマネジメント／4年）



写真①（左）、写真②（右）（1日目：「逆転時間」を体験し、気づいたことを紙に書き出して、シェア）



写真③（2日目：アイスブレイク）



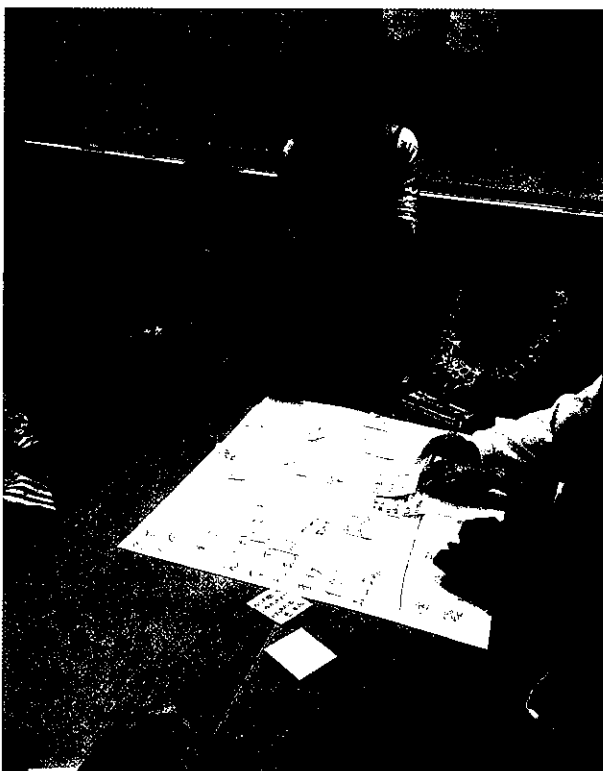
写真④（2日目：活動I）



写真⑤（2日目：作品発表会）



写真⑦（2日目：リフレクション②）



写真⑥（2日目：リフレクション①）

# 『音楽作りワークショップ特別研修』ならびに 第5回『音で遊ぼう！子どものための音楽作りワークショップ』

平成26年度 実習報告（神戸女学院大学）

事業名称	『音楽作りワークショップ特別研修』ならびに 第5回『音で遊ぼう！子どものための音楽作りワークショップ』
音楽作り指導者	テレーザ・カンボス、ヒール・ビュッシュェ、東 瑛子（9/24~26の3日間） （英国ロンドン市立ギルドホール音楽演劇学校のリーダーシップ修士課程修了生）
企画・司会	津上 智実（神戸女学院大学音楽学部教授）
実施日時・期間	2014年9月24日（水）15:00~17:00、9月25日（木）10:00~13:00、14:00~17:00 9月26日（金）17:15~19:00、9月27日（土）9:00~18:30 ※「子どものための音楽作りワークショップ」は最終日のみ
実施場所	神戸女学院大学音楽館ホール
参加費	神戸女学院生、3大学連携事業ミュージック・コミュニケーション講座受講生・ 既習生（卒業生含む）は無料 一般の参加者（上記以外）：全日参加：5,000円 27日子ども参加：無料
主催・協力など	主催：神戸女学院大学音楽学部 協力：英国ロンドン市立ギルドホール音楽演劇学校、東京音楽大学、昭和音楽大学
参加者数	9月24日~26日：神戸女学院生13名（1年生1名、2年生3名、3年生6名、 4年生2名、院生1名）、一般参加者4名（男性2名、女性2名） 9月27日：神戸女学院生13名（同上）、子ども21名（年長1名、小1年生7名（3 名）、小2年生2名、小3年生3名（2名）、小5年生2名、小6年生1名） *（ ）は男の子 教員・スタッフ7名、逐次通訳6名（院生4名、指導教員2名）

## 〈事業概要〉

本事業の目的は、誰もが持っているクリエイティブな力を音楽によって引き出し、共に音楽を生み出していくために必要な視点と方法を学んで、実践力を身につけることである。

そのため、2014年9月21日からの1週間、英国ロンドン市立ギルドホール音楽演劇学校リーダーシップ・コース修了生のテレーザ・カンボス（ポルトガル人・声楽家）、ヒール・ビュッシュェ（オランダ人・作曲家）2名を日本に招聘し、同修了生で本学卒業生の東瑛子を加えた3名が指導役を務める形で、音楽学部生を対象とする音楽作りワークショップ（Creative Music Workshop）特別研修を実施した。

9月24日から26日までの3日間は学生対象の研修を計4コマ、最終日の9月27日には学生の学びの仕上げの場として、子どもたちを交えた形

で、第5回「音で遊ぼう！子どものための音楽作りワークショップ」を実施した（後者は、本学アウトリーチ・センターが定期開催している「子どものためのコンサート・シリーズ」の関連事業として実施）。

3日間のワークショップ研修では、毎回全員で1つの大きな輪をつくり、身体をほぐしたり手拍子や息の音を隣の人に回したりするアイス・ブレイクから開始された。アイス・ブレイクを入念に行うことによって、一体感と相手の意を汲み取ろうとする心使いが芽生えていった。

1日目は「1, 2, 3」の数字を体現して（1=座る、2=ひざ立ち、3=立つ）人間スコアを作り、それを声に出して数え、新しいリズムを作ったものに、無作為に選んだトーンチャイムの音を当ててメロディーを作りだした。イギリスにはトーンチャイムがないらしく、講師はトーンチャイムを気に入っ

て使用していた。

2日目からは、講師が用意した1枚の絵を好きな方向から見て音楽を考える作業をしてイメージネーションを高めたり、ゲーム（目を瞑り自由に歩きながら中心に集合し、近くの人と手を繋ぎ、その手を離さずに絡み合った腕をほどいて1つの大きな円になる）をして、コミュニケーションを深めた。また、楽器（各自の専攻楽器や小物打楽器など）を用いてのグループによる音楽作りも行った。1コマ目に作成したリズムやメロディーなどを組み込みながら、新しいリズムなどを取り入れて大きな音楽にしていっていった。また、歌や楽器を手で2つのグループに分かれ（リズム／旋律楽器群）、メロディーやリズムを基に、メンバーでアイデアを出し合いながら自分たちの音楽へと発展させていっていった。その後、講師の指示で各グループの音楽を組み合わせながら、一繋がり作品へと創り出していった。

最終日の前日には、新たなメロディーやハーモニーの素になるトーンチャイムを6本選び、音の並びや拍の長さを考え、翌日の子どもたちのための音楽作りワークショップのために綿密なディスカッションをし、準備を進めていっていった。

最終日の9月27日には、年長から小学6年までの子ども21名を交えて、第5回『音で遊ぼう！子どもたちのための音楽作りワークショップ』を行なった。ここでは、前日までの研修でワークショップを学んだ学生たちが講師の指導の下ファシリテーターとなり、子どもたちと音楽作りを行なった。ヴァイオリン、リコーダーなど各自持ち寄った楽器や本学で準備した小物打楽器などを手に、子どもたちも音楽作りに参加した。

挨拶と講師紹介の後、参加者全員で1つの大きな輪になりアイス・ブレイクが行われた。まずは、講師が手や足を動かす動作の見本を示し、それを全員がまねをする形のアイス・ブレイクから、「シッ」という声を次々に隣の人に回していったり、手拍子や足拍子でリズム打ちをしたりした。徐々に子どもたちの緊張がほぐれてくると子どもたちがリードする形へと持っていっていった。この後は、「1, 2, 3」の数字を表現するリズムを子どもたちにも覚えてもらい、子どもたちが選んだトーンチャイムを使いメロディーを作った。そのメロディーに乗せる歌詞作りを3つのグループに分かれて行い、「Why is the world so beautiful?（なぜ世界はこん

なにも美しいのだろう?）」をテーマに、子どもたちから世界にある美しいと思うものを聞き出し、どう美しいのか考え、それを言葉にして歌詞を作った。午後からは学生のハーモニー作成グループと子どもたちの歌のグループに分かれ、創作に励んだ。子どもたちは、先ほどの3つのグループで作った歌詞をまとめあげ、1つの歌に仕上げた。途中、何度か子どもたちの集中が切れるとその都度、アイス・ブレイクを取り入れ、子どもたちを曲作りへと誘う努力を行っていた。グループの創作の成果を発表し合った後、それらを組み合わせて大きな作品へと発展させていっていった。

1日の締めくくりとして、保護者が観客席で見守る中、1日かけて作った音楽を披露する作品発表会を開催した。講師の指揮で、まずは子どもたちの歌から始まり、それに学生がハーモニーを付け、さらに楽器の演奏も加わり、リズムカルで雄大な作品へと繋がっていった。最後には、「パラッパ!」と全員で息を合わせて10分を超える演奏を締めくくった。客席から盛んな拍手と、子どもたちの満足そうな微笑みが印象的であった。その後、グループごとに学生と子どもたちで一日の振り返りをした。子どもたちからは、長かったが楽しかったと概ね満足した声が多数あがった。子どもたちを帰した後、学生たちと指導陣で研修全体および最終日についてのディスカッションを行なった。学生からは、「子どもからどうやってアイデアを引き出すのがいいのか」や「落ち着きのない子どもにはどのように接したらよいのか」といった質問が多数出され、講師は自分たちの経験を踏まえた事例を挙げて答え、学生の意識を高める話し合いとなった。

なお、全日程を通じて本学大学院通訳コースの院生4名が交代で、また27日のワークショップ時には院生3名と指導教員2名（中村昌弘准教授、奥村キャサリン専任講師）が逐次通訳で、相互理解を助けてくれたことを記して感謝する。

#### 〈参加者の声〉

・今回が私にとっては3回目のワークショップでしたが、リーダーや参加する学生たち、子どもたちの顔ぶれによって毎回できあがる音楽が違うのでとても新鮮で、特に今回は自分たちで創り上げている感覚があって楽しかったです。外部からも数人の参加者がありましたが、考え方や音

楽性が新しく刺激的でした。「The world is so beautiful」というテーマもとても素敵だと思いました。  
(オーボエ／3年)

- ・ 昨年に引き続き2度目の参加でした。初日から3日目までは自分が音楽作りに参加する立場として純粋に楽しむことができました。恥ずかしがらずに思い切って自分の意見を出してみること、まずはやってみることで、より良い空気が生まれ、素敵な音楽作りの時間になっていくのを実感しました。他の人の意見が自分では思ってもみないことだったりして、「なるほど!」と思う瞬間があっておもしろかったです。最終日、子どもたちと1日過ごして音楽作りをするのはやはりむずかしかったです。積極的な子、消極的な子、やる気がない子... いろんな子どもがいて、その子たちにワークショップの時間が楽しいと思ってほしくて本当に頭を使いました。でも、どの子に対しても「ほめる」ことは有効でした。今までの反省を活かし、私自身は周りをみながら落ち着いて行動することができました。  
(声楽／2年)

- ・ 去年も参加しましたが、1年前ということもあり、初日が始まるまで、外国人とワークショップをするというのが不安でたまりませんでした。しかし始めてみると、そんな不安も忘れ、ただただ楽しんでいました。アイスブレイクや音楽作りの間、常に私たちに目を配ってくれていたのが印象的でした。最終日、子どもたちもやってきて一緒に楽しみましたが、一番むずかしいのはコミュニケーションをとることでした。いろんな性格の子どもたちがひとつになって音楽をするなんてむずかしいと思っていましたが、それが可能なのがワークショップなのだと思います。ただ、今回リズムがややこしい時があり、たまに自分自身ができなくなってしまったのが残念でした。子どもたちにもわからない子がいたろうし、自分が理解して一緒にやれるよう、もっと音楽的な力をつけていきたいです。  
(ピアノ／2年)

- ・ 今回は私にとって前回以上に大きな影響を受けたワークショップでした。リーダーも少しさせてもらって、ソロをする機会ももらいました。いつもは人の後ろから観察したり、サポート役に回ったりが多いため、貴重な経験ができましたし、自分

のスキルやリーダーとしての周りへの気配り、周りを引き込む力の不足に気づかされました。今後はもっといろんな場に出て、少しずつでもリーダー役をしていくべきだし、もっと皆を引き込むための力を身につけたいと感じました。これから自分の音楽を探しながら、いろんな人とまずは音楽を共有できる人になりたいです。

(オーボエ／3年)

- ・ 今回の反省点を次のワークショップに活かすことはもちろん、日常生活の中でも自分の考えを口に出してみることや人の意見を聞くこと、視野を広げてみることを心がけたいです。(声楽／2年)
- ・ すばらしい演奏をありがとうございました。今日初めて会ったばかりとは思えないハーモニーでした。自然の美しさ、音楽の美しさが、今回の曲・歌・演奏から伝わってきました。こんなすてきな体験をさせていただくことができ、大変感謝しています。指導してくださった先生方、学生さん方本当にありがとうございました。(保護者)
- ・ 子どもには長時間のプログラムかなと思いました。発表の時にはニコニコと楽しそうな顔をしていたので安心しました。とても充実した一日になったのだと思います。娘は去年に続いての参加でしたが、行く前からとても楽しみにしていました。またこういう機会があればと思います。ありがとうございました。(保護者)
- ・ 音楽を一からつくっていくという作業は子どもにとって初めての経験でした。今日の経験をどのように感じたか、また今後どのように影響があるかを見守っていくのが楽しみです(ピアノを習っています。より意欲的に練習するようになるというのを願っています)。また機会がありましたら来年のワークショップにも参加させたいと思います。(保護者)
- ・ 様々な年齢のお子さんたちと一つの曲を作り上げるという体験ができ、大変うれしく思っております。先生方のご指導により、きっとみんなでハーモニーを作り出す楽しさや、リズムを感じる心がはぐくまれたと思います。また機会があれば、参加したいです。(保護者)



アイスブレイク



人間スコア



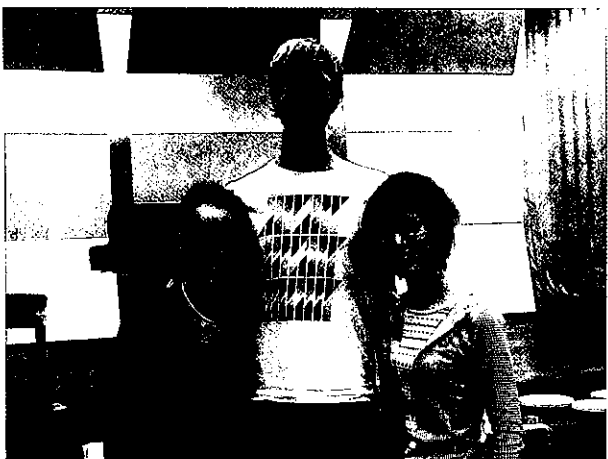
トーンチャイムを選んで



作品発表会



作曲のモチーフ



講師の先生方

2014年度「3大学（神戸女学院大学音楽学部、東京音楽大学、昭和音楽大学）連携」プロジェクト

誰もが持っているクリエイティブな力を音楽によって引き出し、共に音楽を生み出していく——そのために必要な視点と方法を学んで、実践力を身につけます。英国ロンドン市立ギルドホール音楽演習学校のリーダーシップ修士課程修了の音楽家2名（オーストラリア出身のテレーサ・カンボスさんとオランダ出身のヒール・ビュッシュェさん）が来日して、同じく修了生の東原さんと共に、皆さんの「音楽作りワークショップ Creative Music Workshop」の指導に当たります。

最終日の土曜日（9/27）には、3日間の学びを精まえて、学生がファシリテーター役を務める機会として、子どもたちの音楽作りワークショップを行います。

貴重な機会ですので、音楽を通じてのコミュニケーションに興味のある人、卒業後に社会の中で音楽の場を作っていきたいと考えている人は、積極的に受講して下さい（定員45名、先着順）。

**スケジュール☆**

- 9/24（水）15:00~17:00  
「セッション1」
- 9/25（木）10:00~13:00  
「セッション2」  
14:00~17:00  
「セッション3」
- 9/26（金）17:15~19:00  
「セッション4」
- 9/27（土）9:00~16:00  
「子どもたちの音楽作りワークショップ」  
16:30~18:30  
「反省会」

**テレーサ・カンボス（Theresa Campos）**  
英国ロンドン市立ギルドホール音楽演習学校のリーダーシップ修士課程修了。オーストラリア出身の音楽家。現在は、オランダの音楽家と共同で音楽制作を行っている。

**ヒール・ビュッシュェ（Chiel Buisson）**  
オランダ出身の音楽家。自伝プロデューサー、クロスアート・コラージュアーティスト。現在は、オランダの音楽家と共同で音楽制作を行っている。

**東 真子（あずまいこ）** 2011-2014の3日間  
神戸女学院大学音楽学部音楽系、同人大学卒業。並びに、英国ロンドン市立ギルドホール音楽演習学校のリーダーシップ修士課程修了。現在は、オランダの音楽家と共同で音楽制作を行っている。

**◆受講料◆**  
上記3大学（MC講座）受講生及び受講済みの方、神戸女学院大学学生：無料  
一般（上記以外）：全日参加 5000円

**◆申込/ 問い合わせ先◆**  
件名を「WS申込」と明記  
①氏名・学年または年齢、②大学名または所属先、③MC講座受講の有無、を記入して  
kobe-cgmusic-communication.com までお申込み下さい。折り返し、お申込み完了メールをお送りいたします。

神戸女学院大学音楽学部 連携ルーム（平日10:00-15:00）  
〒562-8505 西宮市夙田4-1 電話/FAX: 0798-51-8588 E-MAIL: <http://www.kobe-c.ac.jp/musicdept/phenel/>

チラシ

## おわりに

平成 21 年度からスタートした音楽系 3 大学（東京音楽大学、神戸女学院大学音楽学部、昭和音楽大学）の連携プロジェクトは、6 年目の今年度も安定した活動を継続しました。

連携プロジェクトの開始当初に履修していた学生たちが卒業し、履修者が第二世代となる中で、音楽ワークショップへの関心を常に新しく喚起しつつ方法論の精度を上げ、同時に卒業生や学生たちがワークショップを実践できる場を確保・拡大していくことに、各大学がそれぞれ努力を払っています。

今年度は、インターネット・ビデオ会議システムによる中継授業に多様な講師を招聘したほか、9 月にはギルドホール音楽演劇学校リーダーシップコースの修了生 2 名を講師として東京音楽大学と神戸女学院大学に招き、一般参加者を含めて、音楽ワークショップの組み立てとリードの方法の実践的な指導を受けました。また、各大学で実践したワークショップや学外で行われている音楽ワークショップ関連のセミナーについて、画面を通して情報共有の機会を設けました。大学の壁を超えて自分たちの活動を報告し、意見交換することは、学生たちにとって大変刺激的で示唆に満ちた学びとなっています。

こうした学びの成果として、平成 27 年 2 月の「みえアトラボ 2014」（於：三重県文化会館）では、ミュージック・コミュニケーション講座の内容を反映した「音楽ワークショップの開発」を 2 日間にわたってデモンストレーションする機会をいただきました。また同じ時期に、東京文化会館主催のワークショップ・リーダー育成プログラムでは、過去にミュージック・コミュニケーション講座を受講した卒業生 3 名が今年度の研修生として選抜され、ポルトガルに短期派遣されることとなりました。

今後もさらに、本プロジェクトの内容・成果を社会の中でアピールし、優れた人材を輩出すべく、プロジェクト内容を柔軟に工夫し、力を尽していきたいと思います。この取組を支えてくださっている学内外の皆様方に御礼申し上げますと同時に、今後ともさらにご理解とご支援を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。

2015（平成 27）年 3 月

音楽系 3 大学連携事業 取組責任者  
武石みどり（東京音楽大学 教授）



音楽系3大学による共同プロジェクト

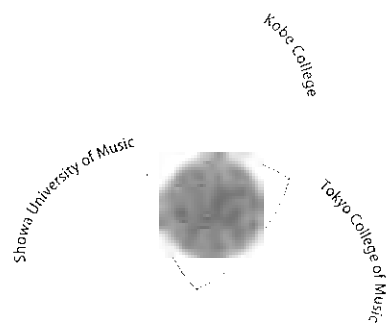
音大連携による教育イノベーション～音楽コミュニケーション・リーダー養成に向けて

## 平成26年度 活動報告書

平成27年3月 発行

発行者 東京音楽大学 連携センター  
〒171-8540 東京都豊島区南池袋 3-4-5  
Tel:03-3982-3513 Fax:03-3982-3227

編集 神戸女学院大学音楽学部 連携ルーム  
東京音楽大学 連携センター  
昭和音楽大学 連携ルーム



音楽の力、伝えるスキル。  
文部科学省選定 音楽系3大学による共同プロジェクト

